

学生による地域政策の提案

～公共政策フォーラムへの参加を通して～

「公共政策フォーラム」「大学生による政策コンペ」において、開催地域それぞれの課題に取り組んで政策提案を行っています。



提案用に作成したリーフレット (2015年)

活動の概要

| | |
|-----------------|---|
| 目的 | 地域に適合する活性化政策の提案 / 研究を通じた学生のプレゼンテーション能力の向上 |
| 連携メンバー および役割 | 公共政策フォーラム実行委員会 (日本公共政策学会・各市町村) …フォーラム主催、提案内容の審査 (2014年) 京丹後市議会 / 京丹後市教育委員会…フォーラム後援 京丹後市役所 / 京丹後観光協会 / 京都府織物・機械金属振興センター 他…取材協力 (2015年) 特定非営利活動法人熊野で健康ラボ / 一般社団法人由布院温泉観光協会…取材協力 (2016年) ニュー・グリンピア津南…フォーラム後援 / 津南町観光協会…取材協力 関西大学社会安全学部 永田尚三ゼミ…現地調査、分析および研究発表の実施 |
| 活動地域 | 公共政策フォーラム開催各地、関西大学高槻ミュージズキャンパス 他 |
| 活動期間 | 2014年～(継続中) |

連携の経緯

日本公共政策学会は、毎年全国からモデル地域を選定し、その都市の公共政策の研究、地方活性化政策を考える「公共政策フォーラム」を開催しており、その中で「大学生による政策コンペ」を実施している。同学会に所属する永田は、長年この研究フォーラムに参加しており、2014年度からゼミ活動の一環でコンペ出場を続けている。

解決すべき課題

- (1) 観光資源の効率的な活用
- (2) 市町村合併による地域間・構成員同士の連携



津南町教育長賞を受賞 (2016年)



プレゼン資料の一部 (2016年)

釧路市議会議長賞を受賞 (2015年)

大学の役割

「公共政策フォーラム」では、開催地となる自治体の市政に効果的な公共政策提案を課題として「大学生による政策コンペ」を開催している。以下は各年度のテーマと、永田ゼミの発表テーマである。

- ・2014年 (in京丹後) 『二十一世紀の北近畿新時代をつくる
～これからの日本と世界の持続可能で真に豊かな発展を先導するモデルとなる地域へ～』
発表テーマ：「シルクのリサイクルで地域の活性化」
- ・2015年 (in釧路) 『東京、大都市部から地方へひとの流れが地方を元気に、日本を元気に』
発表テーマ：「クアオルトでつながる都市をめざして～夏季に限らない長期滞在者誘致事業～」
- ・2016年 (in津南) 『みんな雪のおかげ』
発表テーマ：「雪資源を活用した湯治文化の再構築による地域活性化策」

提案に向けた第一歩として、永田ゼミでは地域のニーズや課題を把握するためのヒアリングや、観光資源の調査に取り組む。現状の徹底的な調査によって、解決できる課題とそうでないものの分類や、優先順位づけが可能となり、地域資源を活かした低予算での政策や、地元の人が気が付かない地域の強みを伸ばす政策など、理想と現実のバランスが取れた提案に繋がる。
今後も永田ゼミは公共政策フォーラムを通じて、地域のニーズ・資源・課題の発見を行いながら、研究対象となる地域の課題解決を目指していく。

成果

- (1) 2014年 京丹後市教育長賞受賞
2015年 釧路市議会議長賞受賞
2016年 津南町教育長賞受賞
- (2) それぞれの自治体で活用可能性のある政策を提案

今後の展望

- (1) 次回公共政策フォーラムでのより良い提案

研究者の紹介



社会安全学部 准教授
永田 尚三
(ながた しょうぞう)

消防防災行政研究について、行政学、公共政策学、政治学の分野から長年研究している。研究のみならず、実務家の政策教育活動も熱心に行っている。

現場の声



・不破大晴 (社会安全学部 永田ゼミ3年生)

私たちのゼミは継続性のある地域復興案の研究に取り組んでいますが、2016年度のテーマ「みんな雪のおかげ」で復興案を考えることにチーム全員が頭を抱えました。しかし現地の状況を徹底的に調査していくにつれ、津南にしかない湯治文化の再構築という政策の提案ができました。また、3年連続の入賞も果たし、自分たちの成長を感じています。



・山原優樹 (社会安全学部 永田ゼミ4年生)

2015年度は、前年に引き続きでの入賞とゼミ初の最優秀賞を目指し、論文の作成やプレゼンに取り組みました。連日、議論を重ね、ただ政策を発表するだけでなく、リーフレットの作成や釧路の食材を使ったお弁当の提案など、イメージしやすい政策立案になるよう工夫を凝らしました。市職員の方から、「想像がかかたでられる発表だった」という言葉をいただき、ゼミが一丸となって頑張った成果が現れたことに喜びを感じました。また、現代の日本にとって重要な地方創生について具体的に考える貴重な機会となり、このコンペを通して、ゼミとしても個人としても成長できました。